

新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



島へ

島で、或あさ、
鯨がとれた。

どこの家でも、
鯨を食べた。

鬚は、呻りに、
売られていった。

りらら、鯨油は、
ランプで燃えた。

鯨の話が、
どこでもされた。

島は、小さな、
まじしい村だ。

ワキタヨシコ
イラストレーター
wakitao.com

型染めでイラストをつくり、文具や雑貨、
書籍などの制作に携わる。
生活のお供に、楽しく、こころよい色と形を
お届けできるよう日々奮闘中。

絵について

鯨が島の人々の生活を支える様子を描きました。
貧しさがクロースアップされがちですが、
自然からの恵みを大切に享受する人たちに
スポットを当てたいと思いました。

新美南吉



にいみなんきち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県
知多郡半田町(現・半田
市)に生まれる。幼くして母
を亡くし、養子に出される
など寂しい子ども時代を
送る。旧制半田中学校卒業
後、「赤い鳥」入選を契機に
北原白秋や巽聖歌の知遇
を得る。昭和18年、結核の
ため29才で世を去る。

解説

この作品を読む時、いつも心に浮かんでくる
のは、特に知多半島の篠島と、もう一つは、か
つて捕鯨で村の生計を立てていた和歌山県
太地村の姿だ。篠島には、島の西の方に今でも
鯨浜と呼ばれる地名が残っており、いつの
頃だったか、この浜に鯨が打ち上げられた、
という話が伝わっている。郷土のことや各地

の捕鯨のことなどが、どれだけ南吉の心の内
にあったのか知るよしもないが、南吉の創作
した「島」には、太地の人々を描いた津本陽の
小説『深重の海』に見るような、厳しい現実
はない。ここに在るのは、一頭の鯨が、貧しい村
の人々にもたらした恵みを、冷たいほど静か
に美しく表した詩の世界だけだ。

解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小中
学校勤務を経て'04年から'11
年まで新美南吉記念館館長を
勤める。著書「南吉の詩が語る
世界」(一粒社出版部)「子ども
たちに贈りたい詩」(教育出版
センター)「新しい詩の創作指
導」(共著・明治図書)ほか。